

大学キャンパスマネジメントにおける室の有効利用に関する研究

—鹿児島大学郡元キャンパスの講義・実験・演習室の事例—

正会員 ○ 中内直美\*1  
同 友清貴和\*2

キャンパスFM 利用度実態 授業形態 室利用率

1. 研究の背景・目的

鹿児島大学(以下、本学)では、大学キャンパスFMの推進が図られている。現在、より実態に添ったFMの進行を目指し、全学的な施設状況の把握のために、基本情報を収集する実態調査を進めている。

本研究は、本学にキャンパスFMを適応するために、本学の現状に即したFMの方針や規則の検討を目的とし、本論では、本学郡元キャンパスの講義・実験・演習室などの授業での利用実態を把握し、課題抽出を行う。

2. 研究の方法

本学郡元キャンパスに属する法文・教育・工・理・農学部5学部と共通教育(以下、各学部)において、授業で利用される講義・実験・演習室など(以下、各室)の実態把握のための資料を収集する。それらの資料を整理・分析し、各学部における特徴や問題点の抽出を行う。

3. 授業に関する講義・実験・演習室の利用実態把握

3.1 利用の実態把握

大学における教育活動のうち授業が行われる空間は、機能や形態によって講義室・実験室・実習室・演習室の4種類に分類することができる。各室に細かい対策を示すために、授業による利用の実態・使われ方の問題点を把握する必要がある。

3.2 調査の対象・方法

本学郡元キャンパス各学部における平成16年度の前・後期通常授業で使用する各室を対象とする。各学部の時間割表、シラバス、履修受付集計表をもとに、授業の形態、室の形態を分類する。室利用率・座席利用率を以下のように定義し、指標として用いる。

$$\text{室利用率}(\%) = \frac{\text{総授業利用コマ数}}{\text{授業可能コマ数} = 25 \text{コマ}} \times 100$$

※ 25コマ=週5日×5時限

$$\text{座席利用率}(\%) = \frac{\text{受講者数}}{\text{座席数}} \times 100$$

表1 各学部 室と授業データ

|      | 室数  |    |    |    |     | 合計  | 授業数  | 室利用率 | 座席利用率 |
|------|-----|----|----|----|-----|-----|------|------|-------|
|      | 講義  | 実験 | 実習 | 演習 | その他 |     |      |      |       |
| 法文学部 | 46  | 1  | 0  | 3  | 3   | 65  | 365  | 19.5 | 59.3  |
| 教育学部 | 35  | 7  | 11 | 7  | 6   | 66  | 1015 | 18.0 | 48.0  |
| 工学部  | 23  | 12 | 10 | 6  | 1   | 52  | 568  | 17.6 | 40.6  |
| 理学部  | 27  | —  | —  | —  | —   | 27  | 401  | 19.7 | 40.4  |
| 農学部  | 22  | 6  | 13 | 1  | 3   | 45  | 320  | 15.7 | 51.5  |
| 共通教育 | 85  | 3  | 1  | 1  | 3   | 93  | 865  | 18.6 | 46.0  |
| 合計   | 240 | 29 | 35 | 28 | 16  | 348 | 3534 | 18.2 | 47.6  |

注) ・色付けされた部分は、文章での説明と対応している箇所を示す。  
 ・授業数とは、1室における90分授業を1コマとした場合の総コマ数である。  
 ・理学部の「—」は把握できていない室を示す。また、授業数も一部欠損している。  
 ・室数は、各学部が利用している室であり、他学部の室と重複して数えられている場合がある。  
 ・「その他」の室は、各研究室、会議室、多目的スペースなどを含む。

4. 各学部の特徴と問題点

データの分析から、各学部のカリキュラム、室利用の特徴と問題点を示す。

4.1 法文学部

カリキュラム 所定の単位以上を取得すれば卒業できる単位制で、授業の受講年次や科目は個人の判断による。授業 授業は学科、コースごとに行われるが、学部共通の授業が多い。大半の授業は選択科目である。少人数制の演習の授業が多く、講義授業数を上回り、実習も高い割合で行われている【図1】。

講義室の問題点 通常授業で利用されていない室が存在している。これらは大学院や授業外での利用が考えられ、利用状況の把握が必要である。

授業数に対して室数が不足していることから、総合研究棟や共通教育棟などの他学部の教室を利用している。演習室の問題点 ビデオ・プロジェクターなどの設備が少なく、映像や画像による学習が制限される。演習は、発表や討論を行う場合もある。人数や授業内容によって座席の配置形態が変化できるように配慮する必要がある。

4.2 教育学部

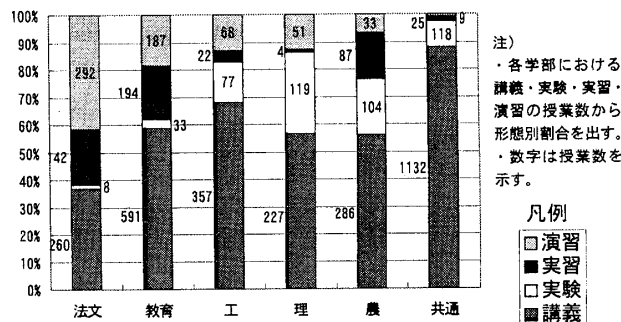
カリキュラム 各専修に合った免許取得を目的とするため、個人の判断によって受講科目・年次を決める。

授業 授業は、専修ごと、免許の種類ごとに行われる。音楽・美術・体育などの専修や技術・理科など理系の専修では、実習や実験の割合が高い【図1】。

講義室の問題点 通常授業で利用されていない室が存在している。これらは大学院や授業外での利用が考えられ、利用状況の把握が必要である。

また、室規模別で授業数と室数を比較すると、小規模な室は授業数に対して少ないが、大規模な室は多い。

実験室の問題点 実験装置などの設備が特有用のものである。



注) ・各学部における講義・実験・実習・演習の授業数から形態別割合を出す。  
 ・数字は授業数を示す。

凡例  
 ■ 演習  
 ■ 実習  
 □ 実験  
 ■ 講義

るため、他の実験室への転用が難しい。

**演習室の問題点** 演習の授業数に対して室数が不足している【表1・図1】。

#### 4.3 工学部の特徴

**カリキュラム** 平成14年度に導入された、1期に履修できる単位の制限(20単位以下)や進級制度により、受講科目・年次が決まっている。

**授業** 授業は学科ごとに行われる。実験・実習・演習が多く、それらの授業は午後に行われる【図1】。

**実験室の問題点** 実験室は授業が行われる時間だけではなく、機器によって計算・測定・観察が行われている時間も室の利用と捉える必要がある。

学科ごとに保有する棟内に講義・実験・実習室に加え、研究室や事務室等も配置されている。このため、実験室から発生する悪臭・騒音、汚染物質等が、周囲の室や環境に与える影響を配慮した整備を行う必要がある。

**実習室の問題点** 工学部の建物は、老朽化が進んでいる。利用方法の変化や新しい設備への改善を図らなければならない。利用方法や利用要求の定期的な点検などが必要である。また、時間に制限されず利用できる室が不足している。

#### 4.4 理学部の特徴

利用教室、各コースごとの現員、室の所在・形態など、データの管理体制が整っていなかったために、把握ができなかったものがあつた。理学部は、それらを除いた分析とする。

**カリキュラム** 進級制度があり、受講科目・年次が決まっている。

**授業** 授業の履修は学科・コースごとに行われる。実験の授業数が多く、実験の授業は午後に行われる【図1】。実験は、週に3日かけて行う場合がある。

**講義室の問題点** 大規模な講義室数が足りていない。

**実験・実習室の問題** 利用状況は担当教官だけしか知らない部分があり、実態把握ができなかった。

**問題点** 共通教育棟に室が分散しており、効率的な利用が困難である。

#### 4.5 農学部の特徴

**カリキュラム** 1期に履修できる単位の制限(25単位以下)や進級制度があり、受講科目・年次が決まっている。

**授業** 授業は学科・コースごとに行われる。実験や実習が多く【図1】、それらの授業は午後に行われる。

**講義室の問題点** 室数が少なく、室の規模も限られているため、受講人数に対応しにくい。

また、通常授業で利用されていない室が存在している。大学院や授業外での利用が考えられ、利用状況の把握が必要である。

**実験室・実習室の問題点** 実験室や実習室の一角に教官室や学生研究室があり、機能の分離ができていない。ま

た、受講者数に適する規模の室がなく、複数の実験・実習室を利用して授業を行っている。

#### 4.6 共通教育の特徴

**カリキュラム** 本学全学部の学生に専門教育以外の幅広い教養を提供するため、教養科目、情報科学科目、外国語科目、体育・健康科目及び日本語・日本事情科目(主に留学生向け)の授業を行う。

**授業** 各学部・学科などの枠を変化させた「組」ごとに行われる。講義による授業が多い【図1】。

**講義室の問題点** 各学部での開放科目もあるため、利用室が全学部に及び、利用者の把握が困難である。

#### 4.7 全体考察

全学部の室利用率は20%以下と低く【表1】、授業数に対して室数は足りていることを示しており、室形態や学部によってその傾向は異なる。各室の利用には様々な問題があり、以下にまとめる。

**カリキュラム** 法文・教育学部の文系学科では、履修が個人の判断によるため、受講状況の把握ができない。履修状況把握のための対策を行う必要がある。

**授業** 工・理・農学部の理系学部では、午後から実験・実習などが行われるため、講義室の利用率は下がる。各室と利用の調整を行う必要がある。

**教室** 実験・実習・演習室では、室の機能が限定されているため、各学科による共同利用が困難である。理・工・農学部は、実験・実習・演習室の利用状況が把握されていない。利用状況把握システムの導入が急がれる。

**利用方法** 工学部では講義室が少ないため、利用する学科や学年を固定しており、受講者数を配慮した室の選択が困難である。

全学部ともに、自習室やリフレッシュスペースがないなど、利用者への配慮がされていない。

授業に関する問題を解決するために、授業内容や受講者数を把握し、実態に添った室や設備の有効利用を行うことは、快適性や効率性の向上を図ることにつながる。

#### 5. 総括

本学での授業に関する各室の利用は、学部によって様々な問題を抱えている。問題点を明らかにし、具体的な整備へのきっかけとなることが、本論で行った全学的な現状把握の意義である。また、学部・学科によって、資料の管理体制・現状把握の程度は全く異なり、全学的に統一された管理システムの整備などキャンパスマネジメントの必要性を感じる。

- 参考文献 ・今後の大学などの施設管理に関する調査研究協力者会議  
 : 国立大学等施設に関する点検・評価について  
 : 知の拠点—大学の戦略的施設マネジメント  
 ・高等教育情報センター: 21C キャンパスの創造と計画  
 ・日本建築学会: キャンパスマネジメントハンドブック

\*1 鹿児島大学大学院 博士前期課程

\*2 鹿児島大学 教授・工博